

巫女とテストと召喚獣

如月 達也

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この物語は、『東方Project』の主人公である博麗霊夢が文月学園に通う話である。

その巫女はこの学園で何を学び、どのような学園生活を送るのであろうか――

更新するかはわかりません。詳しくは活動報告にて。

目次

プロローグ

1

第一問

4

プロローグ

私立文月学園。試験召喚システムと呼ばれる特殊な制度を導入しており、学園でありながらそのシステムの研究施設という役割も担っている施設である。

その文月学園では今日、新たな年度を迎え、一学期が始まる。生徒達が校門から校舎へ入っていく中、一際目立つ格好の女子生徒が校門を潜ろうとしていた。

その生徒は服装こそ規範通りであるが、後頭部に結ばれた大きな赤いボンがあり、顔の両脇には一縷ずつまとめて赤い髪飾りをつけているという奇抜な容姿が特異性を表している。

その少女——博麗霊夢は校門を潜ろうとするが、そんな彼女に声をかける一人の男がいた。

「お前にしては遅いんじゃないか？おはよう、博麗」

「ええ、つい二度寝をしてしまって。おはようございます、西村せんせー」

名を西村宗一。趣味はトライアスロン、生活指導の鬼であり、何人もの生徒に地獄の補修を受けさせてきた、筋肉教師である。

生徒達からはその姿と教育方針から、『鉄人』という渾名が付けられている。

「二度寝か……前日に夜遅くまで起きていたのか？あまりそういうことはしないほうが体のためだぞ？」

「ええ、私も早く寝たいんですけどね……最近は家での行事準備が忙しくて」

「ああ、お前の家は確か神社だったな。近々祭りでもあるのか？」

「はい、例大祭といいますが、中々大きいお祭りなので先生も来てみては？」

「わかった。予定が開いていれば行くでしょう……と、本題を忘れていた。これを受け取れ」

そう言うのと西村先生は霊夢に茶色い封筒を手渡す。

「クラスの振り分け試験の結果だ。それにしてもお前程の実力なら十分Aクラスだって狙えただろうに…。」

「ネタバレですか？まあ試験中に寝てしまったのは流石に想定外でした…。」

そう。この少女、クラスの振り分け試験中に爆睡したのである。しっかりと書いていたのは名前くらいであり、それ以外の回答は殆ど読めないくらいの雑さの文字が羅列していた。起きたのも試験が終了した後だったので手遅れ。まったく書いていない状態で試験が終わってしまったのである。

霊夢は封筒を開き、その中であつた一枚の折りたたんである紙を開く。

『博麗霊夢……Fクラス』

ですよねー、と霊夢が苦笑する。予想はしていたが、やっぱりか。そういう感情が見て取れる。

「まあ残念だったなとしか言えないが、Fクラスでの勉強、精々励むように」

「はーい、わかりましたー…。これクラスによって設備が違うんですけどっけ」

この文月学園では成績累進式の教室設備がある。二年生からは一学期の始まる前に振り分け試験を行い、その成績によってクラスが決定する。より上のクラスにいく程勉強設備は整っているものとなり、下のクラスへいく程設備は貧相になってくる。

「ああ、お前はFクラスだから…。畳と卓袱台からスタートだな」

「え、すごい過ごしやすそうですね」

「隙間風もあるしそれら設備もボロボロだぞ？あまり良いものでもないと思うぞ。設備をより良いものにしたいのなら試召戦争でも行うんだな」

試験召喚戦争。通称試召戦争というものが文月学園では導入されている。それぞれの試験の点数に応じた強さをもつ召喚獣を召喚して、クラスで戦争を行うことができる。その戦争に勝利することで、

勝利したクラスは負けたクラスと設備と交換することができるシステムである。

「考えておきます。それでは私はこの辺で。まだ明久は来ていないでしょう?」

「ああ、あのバカもFクラスだからしつかり手綱を握ってくれよ?」

「ハハハ… あのバカ久は止められないですって…」

明久こと吉井明久は霊夢の友人であり途轍もないバカである。

「ではまた、西村先生」

素晴らしい残し校舎へ入っていく。Fクラスにはどんな生徒がいるのだろうか、そんな他愛も無いことを考えながら。

———こうして、博麗霊夢の二年生での長い学校生活が始まったのである。

第一問

「… ええ… これ学校の設備なの…？」

校舎の三階まで上がったところでまず目に入ったのがAクラスの教室。霊夢はその設備の豪華さに目を剥いていた。

「ノートパソコンに個人エアコン、冷蔵庫にリクライニングシート。お菓子も食べ放題… 振り分けテスト前日、しっかり睡眠を取っておけばよかつたわね…」

テスト中に寝ていなければ今頃自分はこの教室でゆっくりとくつろいでいたのに… とがっくり肩を落とすが過ぎたことなので気を取り直す。博麗霊夢は切り替えが早い女なのだ。

豪華な雰囲気から逃げるようにそそくさとFクラスへ歩いて行く。

二年Fクラスの教室に意気揚々と歩いていった霊夢だったが、教室が近付くにつれて歩幅が小さくなる。

「えくと… ここ、よね？ 酷い格差社会ね…」

2―Fと描かれた古いプレートを横目に、教室に目を向ける。窓ガラスは割れており、木は一部腐っているようで異臭を放っている。

「ま、まあ中は以外ときちんとなってるかもしれないし？ 早速入りましょうか」

頭の中に広がる不安を振り払い、扉を開ける。そこにはきつと素敵な教室とクラスメイトが…

「早く座れこのウジ虫野郎ッ！」

そんな希望^もは音を立てて崩れ去った。霊夢の目から光が消える。聞き覚えのあるその声にふつつつと怒りを覚えながら声の主へと話しかける。

「… ずいぶんなご挨拶ねえ、雄二」

「つて博麗!?!なんでお前がこんなところに!?!」

彼女を罵倒した赤髪短髪の大男、坂本雄二。博麗霊夢とは友人の枠組みに入る男だ。

霊夢は雄二の隣にある座布団に座りながら罵倒を浴びせてきた本人に愚痴を吐く。

「振り分けテストの時に寝ちゃってね…。前日に夜遅くまで例大祭の準備をしていて」

その言葉に雄二は苦笑する。

「あー…。なんだ。それは災難だったな。あとさっきのは悪かった、明久が来たのかと勘違いしてな」

もう気にしてない、と返事をし改めて教室を見回す。それにしてもなんとというか――

「普通ね」

「それはおかしいと思うぞ?!」

雄二からのツツコミが入るがそれに対し霊夢ははて、と首をかしげる。確かに窓は多少割れてるし教卓や卓袱台もちよつとボロいとは思うが、それだけではないかと。

「それらをそれだけで済ますのは絶対におかしいからな!」

え?と目を丸くする。和室なのはむしろ過ぎやすいし多少ボロいだけの中々良い環境ではないか…。と熱弁をするも、雄二はそう語る霊夢に呆れた目を向ける。

「…そういえばコイツ、環境適応レベルがMAXだったな…」

本を取り出して既にのんびり過ぎす体制を整えている彼女を見て、小さく溜息を吐く。コイツはどのクラスでもやっていけそうだと。

そんな読書を始めた霊夢に三人の人物から声がかかる。

「おお、霊夢に雄二。おぬしらもこのクラスなのじゃな」

「霊夢に坂本じゃない。アキ見なかった?」

「… 久しぶり」

木下秀吉。のじゃ口調と中性的…。というかかなり女性よりの容姿が特徴的の男である。博麗霊夢とは友人にあたる。

島田美波。

帰国子女のポニテ女子。長年ドイツにいたということで文系科目が致命的である。博麗靈夢とは友人にあたる。

土屋康太。ムツツリーニという名で女子生徒の写真を生徒に売っている（稀に男子も売っている）。女子の目の前で堂々とスカートの中を覗こうとする変態で、博麗靈夢、ひいては女子の敵にあたる。

「あら、皆もFクラスだったのね。またスカート覗こうとしてきたら二度とカメラをもてない体にするからね？土屋」

「ああ島田、明久はまだ来てないぞ」

二人の受け答えに島田は落胆して、土屋は顔を引き攣らせて自分の席へと戻っていく。

「そう、わかったわ。これから一年間よろしくね？」

「……………俺は覗きなんてしない」

嘘つけ。そう叫びたい衝動をどうにか抑えて彼を見送った靈夢は秀吉に顔を向ける

「それで秀吉も挨拶に？」

純粹な疑問をぶつける。彼だけは席に戻るそぶりを見せていないためである。

「いや、わしは始業までここにいさせてもらおうと思うての。茶も用意したぞい」

そういいながら二人の前に座る秀吉。その手には湯のみと急須がのったお盆がある。

「用意がいいな。じゃあ始業までのんびりしてるか、博麗、秀吉」

「ええ、そうしましょうか。ところで二人とも、最近私が読んでる本なんだけど——

「ほう、歴史ものとな。それは中々——

そうして始業まで、三人でのんびり茶会を楽しむのであった。